優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）

# 野球に学ぶ

慶應義塾普通部　３年　益井（ますい）　英輔（えいすけ）

中３の夏。シニアリーグ３年間の集大成となる大会を１か月後に控えていた僕たちは、熾烈なレギュラー争いを繰り広げていた。週末は朝から晩まで練習。平日も学校から帰宅すると何よりも先に素振りと筋トレをして一生懸命練習していた。全ては50人以上のチームメイトの中でたった９枠しかないスターティングメンバーに選ばれるためだ。

チームメイトはライバルであると同時に僕にとって最も大切な友達である。昼食時の雑談は楽しく、たまに勉強の相談に来てくれる友達もいて少し嬉しくなったりする。練習中はバッティングフォーム等でおかしいところがあれば指摘し合い、互いに高め合っていた。

チームのキャプテンと監督のリーダーシップは目を見張るものがある。試合中にも僕は全く気づかないような所のアドバイスをもらってヒットを打てたことが何度もある。彼らがなんとなく発した声も僕にとっては何かの気づきに繋がるものばかりで、陰ながら尊敬していた。そんなキャプテンと監督だからこそ選手全員がついて行こうと思い、こんなにも大好きなチームができたのだと思う。

このような日々の中、大会３週間前を迎えた。僕は英検を受けに行こうとしていた。せっかくの日曜日で野球ができるというのに英検なんて…と思っていたが、英検の勉強もずっと頑張っていたので受験日が週末と重なってしまうのは仕方ないと思い家を出た。

「行ってきまーす。」

次ただいまを言う時は自信満々な表情で、語尾には「多分受かった」が添えられていると思っていた。駅まで立ち漕ぎ自転車で快走しようと坂道前でペダルを踏み込んだその時。ギアが外れてペダルが空回りしたと分かったと同時に視界が90度傾き左肘に激痛が走った。今まで一度も経験したことのない痛みだった。骨折したかもと思い、まず野球のことを心配した。荒い息で、曲がった前輪を持ち上げ家に引き返した。

「ただいま。」

血だらけの肘で、野球ができなくなる可能性をかかえて絶望の表情で帰宅した。こんなふうに帰宅するなんて１ミリも考えていなかった。母が病院を手配してくれている間も、病院で診察を待っている間も、骨折だけはしていないでくれと願い続けた。診察室に入り、お医者さんに言われた結果は…骨折、全治４週間だった。頭の中が真っ暗になった。大好きなチームメイトと大好きな野球ができなくなってしまう。そう考えるだけで泣きそうだった。家に帰って肘を90度に曲げながらベッドに寝転ぶと少し涙がこぼれた。

落ち着くと、骨折してしまったことを監督に報告せねばと思い電話をした。骨折したことを伝えると大丈夫かと心配してくれた。その時僕から、無意識にこんな言葉が出た。

「練習の手伝いだけでも練習に参加しても良いですか。」

咄嗟に出た言葉に自分もビックリした。すると監督は男前にこう言ってくれた。

「もちろんだよ。来いよ！」

その言葉は真っ暗だった僕の頭の中に光を差してくれた。この時、僕はチームメイトの練習をサポートすることができる。まだ一緒に野球ができるという希望を持ったのだ。電話を切った後、ベッドに寝転ぶと少し涙がこぼれた。もちろん数分前とは別の意味で。

翌週は生憎の雨でミーティングだった。ミーティング室に入るとチームメイトが大丈夫？とたくさん声をかけてくれた。そして僕の骨が治るまでに４週間ということは、１回勝てば僕が試合に間に合うということが分かり、必ず１勝しようと決めてくれた。本当にこのチームに入ることができて良かったと心から思った。

バッティング練習の球入れやノックの球出しをしていると、ありがとうと言ってくれるチームメイトがたくさん居てとても嬉しかった。コーチも大会前で忙しかったと思うが、空いた時間で打撃時の右手の使い方などを教えてくれた。それが効いて、驚いたことに、完治した今では骨折前よりも遥かに打球が強くなった。

今回の経験で分かったことは「谷もまた山である」ということだ。「山あり谷あり」という言葉がある。この言葉だと骨折時の僕は間違いなく谷に居た。しかしその谷があったことで友人や監督、コーチに恵まれていると、普段なんとなく感じていたことを実感できた。だから谷もまた山なのだ。これからもたとえ谷に居ようともそこに希望を見出して一生懸命生きていきたい。